

FRI300GA

情報文化演習－「性倒錯とアートの精神分析」研究－

森村 修

配当年次／単位：3～4年／4単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講 | 開講セメスター：春・秋

人数制限・選抜・抽選：選抜

他学部への公開：×

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本演習のテーマは、「性倒錯」・「アート」と「精神分析学」との関係をもとに、J. ラカン（Jacques Lacan, 1901-1981）の思想にもとづいて理解し、性倒錯やアート作品における「深層心理（無意識・欲望）」の影響を探ることにある。

【授業の目的】

本演習では、ラカン精神分析の入門テキストや彼の講義録などを題材にして、私たちの深層心理がどのように構造化されているかということについて考察することができる。さらにまた、性倒錯やアート作品を深層心理学的・精神医学的に分析することで、「性倒錯」と「深層心理」との関係、または「アート作品」と「深層心理」との関係、さらには健常者の表現と猟奇的犯罪者や精神病者の表現との関係を明らかにすることができる。

【到達目標】

- (1) 私たちの心理や思考を根底で支えている「深層心理（無意識・欲望）」に精神分析学を通じてアプローチすることで、意識と無意識、欲望などの深層心理の構造について理解することができる。
- (2) ラカンの精神分析思想を研究することで、無意識とアートとの関係を学ぶことができる。
- (3) 精神病者のアートが、モダン・アートに及ぼした影響を与えたかをアートの歴史から理解することができる。また、表現としての「アート」を分析する手法について説明することができる。
- (4) 猟奇的な犯罪が「深層心理の表現」として解釈可能であることを、ラカン精神分析を介して理解することができる。
- (5) 心理学的・哲学的テキストの読解方法を身につけることができる。

【授業の進め方と方法】

【授業の方法】

通常の授業では、①指定テキストに基づいた「グループ研究」と、②個人がそれぞれ自分のテーマを研究する「個人研究」の発表を交互に行う。③三年生には「ゼミ論・ゼミ制作」を、四年生には「ゼミ総括研究」を義務づける。④課外活動として、年三回（初夏・夏・冬）行う「ゼミ合宿」を実施する。⑤個別の希望者には、外部講師と連繋した「課外セミナー」や美術館・博物館などの公共施設の訪問なども考えている。

①「グループ研究」では、ゼミ生をいくつかのグループに分けて、事前にそれぞれ担当箇所のテキストを読解し、レジュメを作成しておき、ゼミ当日に担当グループが発表し、それ以外のゼミ生と討議する。

②「個人研究」では、ゼミ生各自が自らのテーマに即して研究を進め、ゼミの所定の時間内に研究発表を行う。その成果を、「ゼミ論」・「ゼミ制作」や「ゼミ総括論文」・「ゼミ総括制作」にまとめてもらう。「個人研究」については、2018年度も引き続き、川村たつる先生のご協力をお願いするつもりである。おもに個人研究の作品制作については、川村先生からの直接的な指導があり、ケアの実践指導ならびに論文制作を、森村が担当する。

③「ゼミ研究」・「ゼミ総括研究」では、三年生には、春学期のグループ研究のまとめとして「ゼミ論」（春学期）を、また年間を通して「個人研究」のまとめとしての「ゼミ論」・「ゼミ制作」（秋学期）が義務づけられており、四年生には、一年間を通して「ゼミ総括論文」・「ゼミ総括制作」が義務である。

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	①演習の概要説明 ②自己紹介 ③ゼミ役員決定

2	グループ研究①『ラカンの仕事』「初期の著作」・「鏡像段階」	①「パラノイア精神病とその人間への関連」 ②ババン姉妹の犯罪 ③鏡像段階論
3	グループ研究②『ラカンの仕事』「現実原則の彼岸」・「ローマ講演」	①現実原則 ②言語と無意識
4	グループ研究③『ラカンの仕事』「盗まれた手紙」・「文字（手紙）という審級」	①シェーマL ②シニフィアン／シニフィエ
5	グループ研究④『ラカンの仕事』「エディプス・コンプレックス」・「精神病」	①エディプス・コンプレックス ②精神病
6	グループ研究⑤『ラカンの仕事』「主体の転覆」・「アンコール」	①主体の本性 ②性的関係
7	個人研究①	ゼミ生（四年生）の個人研究発表「ゼミ論」発表①
8	個人研究②	ゼミ生（四年生）の個人研究検討「ゼミ論」発表②
9	グループ研究⑥『「エクリ」を読む』「ラカンの精神分析技法」・「自我心理学批判」	①治療の指針 ②自我心理学
10	グループ研究⑦『「エクリ」を読む』「無意識における文字の審級」を読む」・「主体の転覆」を読む」	①ラカンの修辞学 ②主体と知
11	グループ研究⑧『「エクリ」を読む』「ラカンのファルス」・「テクストの外で」	①ファルス ②知と享楽
12	個人研究③	ゼミ生（三年生）個人研究発表「ゼミ総括研究」中間発表①
13	個人研究④	ゼミ生（四年生）個人研究発表「ゼミ総括研究」中間発表①
14	個人研究⑤	ゼミ生（四年生）個人研究発表「ゼミ総括研究」中間発表①

秋学期

回	テーマ	内容
15	秋学期イントロダクション	①秋学期の演習概要説明 ②学会のテーマ決定 ③総括研究の注意など
16	グループ研究①『構造と性倒錯』第1部「構造・構造特性・診断的評価」	①精神分析臨床とは何か ②症状と構造特性 ③心的構造
17	グループ研究②『構造と性倒錯』第2部「倒錯過程の構造的論理」	①倒錯について ②ファルスの同一化 ③女性との関係
18	グループ研究③『構造と性倒錯』第3部「倒錯のフロンティアへ」	①精神病と倒錯 ②性別と倒錯 ③性転換症
19	個人研究①	ゼミ生（三年生）個人研究発表「ゼミ論」中間発表①
20	個人研究②	ゼミ生（四年生）個人研究発表「ゼミ論」中間発表②
21	グループ研究④『精神分析の四基本概念』「無意識と反復」 「対象「a」としての眼差しについて」	I 破門 II フロイトの無意識と我われの無意識 III 確信の主体について IV シニフィアンの網について V テュケールとオートマトン

22	グループ研究⑤『精神分析の四基本概念』 「対象「a」としての眼差しについて」	VI 目と眼差しの分裂 VII アナモルフォーズ VIII 線と光 IX 絵（タブロー）とは何か
23	グループ研究⑥『精神分析の四基本概念』 「転移と欲動」	X 分析家の現前 XI 分析と真理 XII シニフィアンの列の中の性
24	グループ研究⑦『精神分析の四基本概念』 「転移と欲動」	XIII 欲動の分解 XIV 部分欲動とその回路 XV 愛からリビドーへ
25	グループ研究⑧『精神分析の四基本概念』 「〈他者〉の領野、そして転移への回帰」 「セミナーを終えるにあたって」	XVI 主体と〈他者〉—疎外 XVII 主体と〈他者〉(II) —ア ファニシス XVIII 知っていると思定された主 体、最初の変数体、そして善につ いて XIX 解釈から転移へ XX 君の中に、君以上のものを
26	個人研究③ 「ゼミ総括研究」中間 発表①	ゼミ生（三年生）個人研究発表
27	個人研究④ 「ゼミ総括研究」中間 発表①	ゼミ生（四年生）個人研究発表
28	個人研究⑤ 「ゼミ総括研究」中間 発表①	ゼミ生（四年生）個人研究発表

※ 本演習では、授業外の活動が重要である。積極的に参加し、自らを磨く「修練」を積むことが本演習では要求されているので、注意を要する。

**【注意】**

基本的に、ゼミで課される課題に集中し、他のゼミ生と交流することが重要である。

**【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】**

**準備学習**

グループ研究は、毎回の担当箇所のテキストを読解し、レジュメを作成するため、グループごとに集まって事前に準備する必要がある。テキストの読解はもとより、他の資料を検討することで、テキストの理解を一層充実させることができるからである。そのために、授業外にグループで集まって集中学習することが、ゼミ内の活性化にも繋がり、各自の研究の広がりや深みを増すことになる。

**【テキスト（教科書）】**

ラカンの著作ならびにラカン講義録を使う。  
ピチュ・ベンヴェヌート／ロジャー・ケネディ『ラカンの仕事』青土社、1994年  
ブルース・フィンク『「エクリ」を読む——文字に添って』人文書院、2015年  
ジョエル・ドール『構造と性倒錯——フロイト／ラカンの臨床的視座』青土社、1995年  
ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』岩波書店、2000年

**【参考書】**

ラカン精神分析学に関するもの  
性倒錯に関するもの

**【成績評価の方法と基準】**

- ①グループ研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25%）
- ②個人研究発表・レジュメの完成度・討議の参加（25%）
- ③ゼミ論（三年生）（50%）／ゼミ総括研究（四年生）（50%）

**【学生の意見等からの気づき】**

特になし

**【その他の重要事項】**

**【授業外の活動】**

①ゼミ卒業生や大学院生との交流がある。年一回年末の「望年会」には、1期生から現役のゼミ生まで、ほとんどの学年の卒業生が集まる。これは、本演習の最大の人的資産であり、他のゼミには絶対に負けない資産といえる。それ以外にも、様々な方面で活躍する卒業生たちの交流が、密接に行われている。

②年三回の「ゼミ合宿」もまた、基本的には参加が義務だが、拘束力はない。向上心をもって、より成長したい人だけが積極的に参加してくれることが前提である。ただ、本演習としては、欠かすことのできない課外活動であることに変わりはない。合宿では、ゼミ生同士の交流、教員との親睦、さらには東京近郊では体験できない他の地域の施設などの訪問など、刺激を得る機会となっている。